

◆海員随想

戦後日本の食糧支えた母船式漁業 興隆期の記憶をたどる② 清水 陸明 当時は、通信長
【日の丸掲揚できず寂しかった】

7 月下旬、なお外航禁止令のなか GHQ の指示により、連合軍用の燃料油積み取り輸送のためペルシャ湾への就航指示があり横浜に回航。8 月 1 日アメリカ人オブザーバー 1 人を乗せてペルシャ湾に向け出港。南シナ海では心ならずも、戦時中に南海に散った多くの先輩の霊に、ひそかに黙祷を捧げつつ南下、マラッカ海峡の静かな波をかき分けて進む舷側の波頭に、月光を受けて反射する夜光虫の光の群れはまことに幻想的であり、思わず引き込まれるような思いがしたことは未だに忘れられない。

当時、同じ指令を受けた油槽船は橋立丸、錦城丸、鶴岡丸、大椎丸、大邦丸、第五山水丸、さんちやご丸の 7 隻であったと記憶しているが、相互に連絡を取り合うこともなく他船の動向は分からなかった。

本船はまずバーレン港に到着したが（本国よりそのような指示は受けていない、それはラスタヌラではないか）とのことでラスタヌラに回航。ところがラスタヌラでも同様であり（本国に照会するので沖合で待機するよう）指示され、オブザーバー 1 人のみ上陸。本船は沖合に停泊待機することとなったが、灼熱の太陽は容赦なく船の鉄板に降り注ぎ、冷房設備のない船内はまさに蒸し風呂、両岸は砂漠、吹きつける風は時にサンドストームとなって肌に痛さを覚えることもあった。

扇風機もただ温風をカラカラと音を立てて掻き回すだけ、連絡手段は無線通信以外にはないので、流れる汗を拭きながら無線室での当直は欠かせなかった。待つこと 10 日間。ようやく着岸、同じ岸壁に荷役中の英国のタンカーはすでに冷房設備は完備されており、うらやましく思ったことであった。ただ荷役のアラブ人は（日本はたいしたものだ、戦争に敗けてもこんな大きな船を持っている）と感心していた。

当時の現地では金持ちは 4 人まで妻を持てるが、貧乏人は妻帯できないために男色が多いようで、物資はアメリカ製品も豊富にあり、当時童顔の小生の入浴中に、タバコ、チョコレート、お菓子等を抱えて浴室の外で待ち構えて、私室まで追い回されて追い返すのにひと苦労したこともあった。

重油の積み込みも終わり、再びオブザーバーを乗せ、帰路何事もなく帰国、揚げ荷終了して第 3 次南氷洋捕鯨事業準備のために、因島ドックに入渠して第 3 次南鯨への出漁準備工事にかかることになり、わが初航海を終了したが、この航海は船尾に日の丸の掲揚は認められず、檣頭(しょうとう)には GHQ の旗のみが翻っていたことは何とも寂しかった。

「海員だより」